

園児一人一人の内面を理解する

4歳児が、作ったものを見立てながらお店ごっこを楽しんでいた。C児は別の遊びをしながら、じっと店員役の友達の姿を見ている日がしばらく続いた。ある日、部屋にあった段ボールハウスの中に隠れてこそこそ何かを書いていた。普段から絵など製作を始めると長い時間を掛けて作り上げる姿があったが、時には自分の絵の中に「へた」と文字で書くなど、自信がもちにくい姿があったため、担任は、あえて声を掛けずに見守っていた。

その日、園児たちが帰った後にC児の書いていたものを見てみると、以前に年長組からもらったような「お店のチラシ」ができていて、店名やメニュー、おすすめの商品まで詳細に文字や絵で描き表してあった。次の日、出来上がったチラシを自分で持って見つめる姿があったため、担任が「それな～に、すごいね！」と声を掛けると、嬉しそうな表情で見せてくれた。そして、担任が「チラシを他のクラスに配りに行こうか」と提案すると「いいよ～」と前向きな返事が返ってきた。その日を境にお店屋さんごっこに参加するC児の姿が見られるようになった。

「入れて」とすぐに言葉にして参加したい気持ちを伝えられる園児もいますが、C児のように、参加したい気持ちを表面に出せずに、一緒に遊びたい、自分なりにこのようにしてみたいという気持ちを内に秘めている園児の姿も見られます。園児が発する言葉だけではなく、目線、表情の変化、行動、製作物など、様々な視点から園児の内面を理解していくことが大切です。

園児一人一人の発達の過程を長期的に見る

D児は、3歳児のときから清掃車などの「はたらくるま」が大好きだった。また、絵を描くことが得意であった。まだ人に対しての興味は薄かったが、好きなことに没頭する姿があった。

4歳児の頃は、他の園児への興味があまりなかったため、友達と遊ぶ姿はほとんど見られなかった。担任はD児の好きなことに寄り添い「はたらくるま」の写真などを用意し、思う存分、絵を描き続けることができる環境を構成していた。D児の姿を見ていた周りの園児たちも、D児は清掃車などが好きなことをよく知っていた。あるとき、他の園児から絵が上手だと認められたり、清掃車が走っていることを他の園児に教えてもらったりする度に、嬉しそうにしているD児の姿があった。その頃から少しずつ他の園児にも目が向き始めた。その後、他の園児が恐竜の絵を描いていたことからD児の興味は恐竜に変わり、様々な恐竜の絵本や図鑑を見ることで、恐竜のことをたくさん知り、誰よりも恐竜に詳しくなった。やがて、年長になり気の合う友達との仲が深まり一緒に遊ぶことを楽しむようになった。誕生日会の出し物では自分の得意な絵を描き、「おえかきクイズ」で皆の前でクイズを披露する姿が見られるようになっていった。